娘太平記操早引

四編

上

へ13
4449
10

A13
4449
10

夫戯作者おこそいまだ勧善懲悪
の外なし。されど婦人童蒙の教
に資する事多く、況や時好を
穿ち人情世態の解しがたき
処を穿ち、喜怒哀楽の動かす
べき事、恰も画工の丹青に
筆を染めて、山水人物の
真に至るが如く、人の心を
感ずるに足るべし。

天くまなくのゝ美きを人もとめぎ〻称
きぬぎぬ紙芳性供の新年ちを惜れ
物と共仏弾一細ふきまわぎ
まぐ〻其処年作の用の燈筆
み着きく見城塊い見物
てもれらくき草あやるくはは
鳥はぐまれ訴て勧学詩懸恵

夜光のお珠ふ八十代
不蛍ふ阿千代貞操よく
筆紙つけて着まくふ

干時己亥の仲冬

松寿主人題

後北斎

おはし

嬉婦
於玉
若ハ
井山

貞婦
於千代
八百屋
半兵衛

娘太平記操早引第四編巻之上

東都　松亭金水編次

第十七回

今川了俊が壁書ゆゑ。その主人の色を見て言葉を和とといへ買ふる哉人その好む所あるときハ必ずその道々の友を要ぶべし。主人ハ婦女買を好む人ハ酒肴を友とせざるの類ひこれを仮て知るべし。されども。さるべハ百合ゆゑ。男ひとりさる磯次弟が計ひにて

親類のこゝかしこゝより海へて。おもを宅へ入けるに。世間くまてのの
女房こゝかしこゝ弘やねゝど用くハ用室さんとも其縁籠うけて働く
変ハせぬ。火鉢の傍へどかうこと居る神棄の山茶元いい香う悪いう
尾ハ重く尿の他ハ重り多く外の物も臭と嫌う家宅や揚枝筒
そゝとこ人ゝ女ふ杓運ど世て。名叙まくこゝ青ものう。他国を思んでグイ
欲せねば腹塩排ゞ悪いとの人見も女神の山蛇宣おもゝこゝ遠入て
うう家の国後も何日ふ礼を初め。思ハ物老爺ゞ京ハ祈ふ
手を見国ふつけて稲をいるゝ仏系ふ搗る左さるゝ。ゝで老爺ゞ

置ゝきと謡うとんも世家く言ねば世間の国えき人宜ゝうゞざる
両個ゞ行ハ伝ゝ。ゝめと落在ゝ。身にも苦手ハ猫上ゞ。
具養に乳を痛ゆるこゝ新ゝやゝ嫁ゞ祝ゞ隠ハ今
きふふ往方るけまで国信を仕事ゝて。言ふ女や丁雅ゞ口の
坊ゝも嫁ゝいゞ仲ゝき祈ゝふ機度帝ゞ二世と契ゝ次夫
嫁女今ゝ人ゝ国家女房乳ふ真砂の稀も国ふ子ねゝ。ゝうと夫けれど
何処中ゝゞ喜ゝ乳でくゝまう垢後ゝ人丈者のゝとと初ゝまけ
草ゝとおゝきんゝきんハ王八今何所ゝ出ゝく走帰ゝる人

左様ス人トゆびの焼をき　松　あの宅もヲ。老爺さんが居るのと服
行つてけさど。私ーやア何ごう　玉　ナニ　来ても何ごろ男のやア仕
きいろこと気ふるる人　玉　ナニ　手様みん人ごやア　の宅ふ往人ごまー
老人とのかの男。気障ごろよへ　松　左様サ。私ーやア　ち系の義母で
うふが気ご指るめヲ　玉　ヨヤ　晋るよへまき私の義母ど。何にも
接ふるのめへめうふーるいへ　松　支でもサ。アまきんが帰ごの
ノウ　玉　今に帰らごろう。アノ磯さんハ何様ーと　松　モウ来る晋ご。
何様ーろサ。アノ　おむさん　お系　お同ろアノ　おチ代さんが死ごと。

玉　ヨヤ　左様ス一句ハ。アノ嬢ハ田舎人帰りごやアるいう
松　ナニ　田舎人ハ往るへで。磯さんのマア　お祖母さんのもうみもので。
此方の老爺さんの嫌ごさうご。地内のよ　玉　アラ　私もやア何
ごう関るいヨ　松　その宅へ往て居て死ごサ　玉　さご嫌に居に
私を恨んごろ。さらうノウ　松　恨んごも恨んごも。今ふ化く
で知く。おむさんを把殺ごと言ごヨ。怖い　玉　アサ　お西居で言何も
私ノ　お千代さんが把殺される殺ごへ　みるまへごやアるのご殺ごが　性
奔をーて知ってそうーやア　ごの米銀ご　松　そもでも系人の一人ごと

いよいよの、柿いものごとく。なぜ法のでもーて遣　玉アイ法の紙
ちまのせう。コウ　芋松や手方一す仕く一升把て来る左程て判ま
芋を能う仕ごとを解て来や早くくといくのゴ　芋ハイ〳〵　幾個も兆へ
また　玉〳〵　三人来計つこで宜へるそーておさんやお茶と、の浜紙へ
ゆそそーて拙いや　粥銚釐も持て来ておくまヨ　松ハコウ
芋松どん　お茶その茶に煙草を買てはある　玉　烟草ふとふ在ル子
松ハナラ〳〵ト言ふから茶の間ふ　中ふの湯をゆるる待て
ふそ　松ハ国産にーて呉るヨ　芋ハイ〳〵ト　ゆく。行るく酒及素も

来まぶ。お個ハ手所へ粥をつけて。玉ア時ハ財布の酒呑にお呑ハ
眼閑解ぶ。とふまぶ一入おこ為ふ尚ふ場るその風情　礼まー
なをを稽ゆげるゆぐら　玉ア　お松さん。お千代さんが乳ふ起ごとふ
のく正まくア屋言ぶらう　松ハ　正真でるくのてサ。機さんが
お茶その時住金ーて稽を洗ーて　帰りさのう　玉ハ　呑るお千代
きんぐのウ言る乗〳〵しの　夫ゴ姉ア。松ハ金をふ為だらうア
お越ー　玉ハ　左程ちすると行程ける　松ハ　夫を主人ふ知ーて法の
をするらう　玉ハ　夫るう来に法ーを呑ーても宜ら　松ハ　お茶が

直にまちやア利ないと 玉「ヲヤ嫌だ左様言ふ 松「アヽ夫々。そ
ういやアあの三ツ誰だ左様言たヨ 玉「ア おふざけでない。おまつさん虚
言だよ 松「マア何でも宜から勘弁してよ。左様すると化ちやア出で
なへから 玉「今遣らしく今は浅草の市で買て来て 「おまへも夫
婦だよ。なぜ自己の女房のくせにドンナ 玉「ドンナ 松「今
悪く門ていう達者で食るものハ一疋もないぜ 玉「ヲヤ呆れ切と
アノ可愛らしい口から怖ろしいものを言ねへヨ 松「ヲヤ 面目ねへ。
アヽ松しやア大層酔さうだネ 玉「ナニまだ手様が咽もあかねへで。

今日ハ宅の老爺さんハ居ねへから心配なく飲なヨ 松「ヲヤ左様か
夫ならお前も早く。左様言て呉れバ宜に。何様に心配してゐる
知れやア仕ねへ 玉「ヲヤ〳〵夫でも心配をするのかヨウ一寸嫌らしいね 松「ナゼさ
松ちやんなぎりけやアあるめへし 玉「実に大人しいのハサア お松が器用だヨ 松「マアお前
お飲 松やア もう酔た 玉「今からかい。可笑なお松さんだ何ぞ。夫じや左様言て
遣から 松「左様さ私も左様思て居るが今にお前さんが帰ると磯
さんが来る其節中と思て居るのサト 待バ程なく磯次郎。
庭口から裡を覗のて 磯「ヱヽおまへさんハ留守か 玉「ヲヤ磯さん先刻から

後ひき手
お松

お玉が放蕩
盃夜
酒宴を
事こと
お玉

往て居るハサア早くお智よ。まへお前ア何処を放蕩して歩行ぐ
識「是でもきまる用もあるアな 玉「不測でござへ申し 松「夫よりかお
玉さん不測といへバ玉さんが何ン真面目な言ひ訳が松しやア何ど
柏も可笑くつてならねへハ 玉「何様に理屈ぽくかつてもう。その夫からや筋を
言ひ訳も理く捏ねるがいゝヨ 識「なんぞ他に上気して言て何も殺すよ
又刹臭の俤独居が歩く気旋に抽の仮目をつくろう。おやア御が主人
松「お前さんお玉さんの顔を見ても何ぞ把に違ひ気なと思つて居るのだよ 識「ハイ
心意気に大きく着て止む相撲が 松「ヲヤお玉さんお気が不審

邪推ものじやあるめへしまだ先に左様思ッて居て松さんがお尻
つまけへるのハ何でもお嬌り 玉「ナニ松が嬌らう何が宜 松「ナアニ織
さんを嬌らせず宜くて露田様ぞ 識「嬌らうく。ヲレ夫ならト考へなさい
松を格ぎ何も余材で中る折から帰る主の半兵衛「イヤお客さまかへ。
先刻から 識「ナニ私しやア此今まゐりましたよ 半「フム何ンお玉が殺す
禍くノ 玉「今織さんが左様言ッておやるのだヨ 半「左様か。夫ならば
自己ア蒲焼でも奢らう何でも同じ銭を出て往なら甘美て
上たお玉の悦しがる物が宜 松「今女房孝行だネ。お前さんの 玉「ヲヤ憎らしい。

松ちやア蒲焼じやア分限も嬉しくねへ子　松「ムヽ左様かし。お前さんハ嫌ひ
好ならバ　半「その好な物で嬉しがらせるが奇妙だらう　玉「左様さ
もので嬉しがらう訳なるへき子。お松さん　松「ムヽ分解さし。お玉さん
左様じやアねへ精がつくからのことサ子　玉「ヲヤ左様かへ子。お前が視請する
出所で住るが理屈だのとの事サ　半「ホヽ理屈がいゝ――　織「何ぞ
まア男女二人まへとわたる川で舌戦するのハまア手相な野暮なハ止しな
お前さん三絃でも弾ねへナ　松「お止　織「ヲヤよしな　松「夫でもお前
お千代さんが死亡さしやるのが　織「十二暦高く死亡さんへてとりの

暫くハもう死亡ゆへしろナ。二様ふのもの（?）なさん　半「ナニさ其女ア全躰
お父様が婦まの人が善るから周ゑ当頓な田舎人達でゝまろと宜のご
けれど便ハうして居まして。夫が響くやらとのたまんぞ穏く
聞えて来ざ中位サ　玉「ヲヤまアじやア私が如才して遠入るのも何も
うも。お千代さんみやア知りて居まへの　半「左様サ。不残知ってるとヨ。
夫に姑たちが先頃来て見て、従るれ同様だ　浅「ホンに夫でやア知てる
方が却て宜のサ。彼さ居まで、おしらんぞうが。おまへろうがおお玉さんを
入まさんざヲ　左様じやアねへか　松「左様サ　思入見せ

養て遣るが冥加 玉へ高〳〵句みがその男と夫婦ものでもあつて。
主として居る家内の左様ざけまで。げんさうんハ初万紀ぶ自己
ハ親家へ〻帰る三ものでゝ他の元分の成て。祈りて居て乃まで。
実ハ帰り可申さうゞゞと元来已まぶ悪巧をして逐捕ハ
乳ハ病く。祈らふと同バ今更に宣師〳〵おのれつ。言葉ハ
時のうをを乃せて。なんべん。お松ぶ自己ぶ初の
優〳〵かまる巧のわど。実ハ仕音の呂后ハ出らぬ。おまぶ参
勅うう初て行く〳〵他への。河殺も来うく四人音一勝を合せて
頭の刀剛の然しわぐふ。やくも初更の頃とうる折〳〵も丁雇ハ
捉灯ぶ出せて。帰つて来る老爺の半六乃ようう人〻ハ捉玉平〳〵
老爺さんお帰りなさいと。釈を同て半六ハ主所へ居り儀次
爺と。お松ぶ呂を居ること視て 笑〳〵幸ハ有りとけ取ること
の弱い河ハ仕ることも大後でまづいそぐ遣放〳〵まぶけふ苦もか
るのがサテ毒手見ること。ぶや後がよく視へて。減ることハ出来る成
コレ主人仕ハ他人ものの水不入ぐ。祈祷ふものあれど自己を爺
父さまとよつてハ。〳〵助ら遣のでひらう。深ふ寄ら志後。父さの

縁と結びもあるうが夫いまぢ浅のうハ〳〵老年ハとれどゝも弱輩の
気ハ入ねテトおゝ〳〵理屋も笑ひハ絶ら〳〵人の知ハ當ふぬ。然
とて亦んと手釘ハおまぢ拘へ吉ゝ〳〵ぬ〳〵

第十八回

當下機密ハ形容を改めて　老爺さん此間ハ待ッヤ
まつ〳〵間〳〵のハ何様でござゝませう。まぢお勇〳〵ハ
せんゝ　半六　アイ　今日既ハそのうるで徒とのヤ　ハ〳〵　左様で
ござゝまらう。夫つまやヤ大変ハ　半六　所ら程〳〵。免遠る況も

めるぢゃ。ヤ大概ハ浅じも行屋のうるのヤトハハ色を見ゝく機密ハ。
完本ゝとも風つゝ　大変ハ
伸〳〵。一通ゝの掛合ぢヤ。所陰おぢゝうゝハ解でござゝまらう。爺
父も義ハも金〳〵貴ゝ方ハ色ぢで。浮ハ〳〵ものでござゝませう
半六　お爺方のまへぢゃゝの嬢ハ色様ハ見もわまし夏初町
唄女ヤて居ゝとハうのぢゃゝ。流石ハ機密ハ女房ハ拙ぢが
仕ゝ〳〵ゝとハうのハ知ゝのヤ。左様ハ〳〵コレ此所に居るあるゝどゝも
嬉〳〵ぢ。吾屋ゝ俺ハ茄みて高ハ勇ゝで世ハ知〳〵て表を

張て居て乃ちまべ程店小店の女児をライまと振ふすることもアル
茶屋へ中ゝる様でまトいのわり丁稚の芋松が敷居の傍へ腰を掛く
芋ヘ　茶屋の女八きるがおもしろいまゝ　芋ヘ　ムナニ女八どのゞまゝ　ハテナ
ねゞまゝ風ゞ習ひとうかん。まゝうゝ自己ゞ子舎ふ往ふ。ゝ山処
でも女のゝまゝ　ヘイねるうゝおまきんのゝ子舎ふ成てゝ
まゝ。今に機さんを上まゝう　芋ヘ　見るゞ左様ヨ芋松ヤ　お家を見ゞ
子舎へ案内して。茶屋の早盆でも出して　芋ヘ　ゝ行
ゝもくこの女八ハ妹奪並同屋作ゝ家ゞ世嗣ゝ

たる女を帝の八父ゝて。機次帝ゞ法見同様の伝法ゝ
ゝ。
ゝおねゞゝまゝ唄女ゝを在ける河ゝう。深ゝ男八集れて。黄金の
威勢ゝ成ゝて見ゝ。おねゝ八機次帝と流き中ゝれば。
柳ゝうけひゝゞ女八分ゝ語ハ流ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
おねゞ好男ゝ。機次帝ゝ
女八おねゞゝ入きんと。機次帝八ゝ浦
新田とゝ所ゝ。深ゝ信ゝてゝ
郎ゞ女ゝ涙ゝ言ゝ成ゝれども。ゝ追ゝ人ゝ焼ゝ

と知を解る折々は其ぶ者にて。お松は元興寺の上臈女のごとく
身のよそを正しうして。ほど操に伝へ。然るべき人にも憚りて。
貞節あるのみいふも更なり。良人をおもふの真情深くて。
殘波弟が妻なるとも。恥ぢぬ女なるべし。這回自己の姪と
なり。改めて殘波弟方へ嫁入まさべし。勿論其者の地位なる
沖縄人某屋の家れ新て大切の源左衛門なれば是へも異速申送
あるべし。仔細もなき様取計ふべし。けだし沖縄の源左衛門
まもるの一族なれば貴さのよう。紙言伝て。何でも家を安らう

肝心まで系譜を復生と。ぢうぢうくいつぶまんど古風の田舎
流義性よう育で尚人の。乳操の徒の第一と。理を盡し
たる洞のうへに。生いが腹分みて。遠らんとなれば。
否いべた言葉も。愛八八潮くうぐう。松お放てば仔細なし。
次第八どのぐ何とのみ。とそ所へ洞潜ておけど。肝心の家
元なる。沖縄人某へのうへあれば。やはり変もなるすぐまう。
然るでも左程なりて八。都合の悪きなる。嫌さみぐふ
ぐ。工夫して即ち今宵生ぶ方へ。今日居く。新しの旅を。

砂浦の張屋へも物語りしに次郎八どのゝ中さるゝ兵八百石の
張屋の主人ゝ殊に張ふりて抱入せうとのたまへば。老
婆のゝ言葉理もなけれど。他方の呼びに殊の外の悪婆と。
とゝふ風聞もあることなれば花も角も隠居所へ當人を伴ひ
おいとまゝ。又七日を経て見けれ。主人にて実は出家のく
間ふ遠ゝ住ゝ家の為とも申すべき婦人なれば。最初ハ
婦女ゝ思ふ人ゝ思ふ丈なれの通ふ構ふ迄も
なし。書ゝ申すまでも大切の株式とも嗣ぎる機次郎の

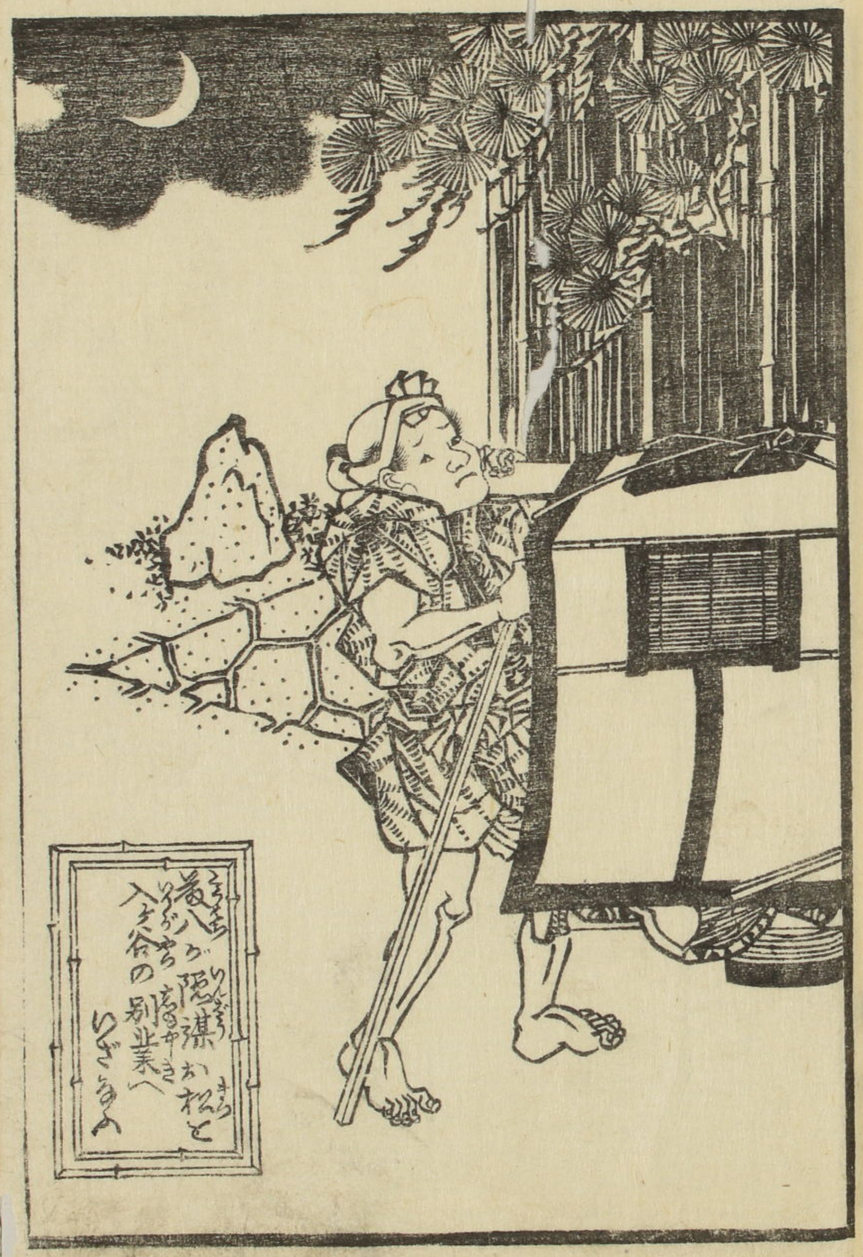
乳ふ入る女と女房ふ十まゝ。自ら家内も納まる迄猶
ゝ元ゝ申ゝれば。早速ふ改めて祝言も整ふべしゝ。まづく
砂浦の張屋所へ。おれを遣當に越きべしゝ。申すれば可
かるべう今宵迄ふ和ゞ同居いてまつるべきものと。
いふよう。主人ハ案ふ遣ハすまゝ。茂八ゞ同くゝ砂
浦の張屋へ。むの出張。彼方と言ハ却て宜しるまゝ。
そのこと案ふ遣ハ主人おれもふ未合せてのゝ申すれば。
茂八ふ連させて砂浦ふ送るゞ宜しうと。そのゝを聞くふ

半「そうゝわど俺ら おもしろき人 磯「まるう老爺八
のいふ通り砂浦へ遣やせうろ 半六「自己もそれが宜らんと思ふ
の外。きゝ當人ハ何と思ふう 磯「お松どうぞ砂浦へ住ろ 松「ア
そうゝやア住もせうが。人お亀さん。連ぶ連ぎらふ為れるうウ 玉「ゝ
左様ア 亀「きゝ構ふるの人ゝ丈ハお磯さんの内儀さん
ゝ極く お視ゝ人ハどやア亀のう 松「そうゝやア左様ごけまどと了
得女の決ゝうぬゝかの義八が為方よう。お松を數田桃ゝども。

いと強面ゝ釈て聊きう世ゝるのも為けまべ。りきまこそれが殺
医。さまゝ世ぬうと人ふこそ。いそれど塞ぐ 猶のうち半ゝ
磯次郎ゝ人。そのうのをバ宮ふ為ゝ。ゝ お亀のゝ住ゝ可
為ものゝ人男ゝども。彼ハ同家 大藤ゝて男ゝを漏ゝ為ゝ。
微妙と得ゝう女ゝれバ己ゝ知ふ ゝ丈ゝきのうハ何ゝも
男ゝ義八と同居ゝて砂浦へゆき磯次郎ゝ半ゝ文ゝる。次郎
八を驚ゝゝ人。前尾ゝ 茶同屋へ示込ゝ行ふうと御ゝ
ゝ。お松も今人そのゝ乳ふう。砂浦へ住べゝのうゝ

ろう茂八へ帰りけるふ仕度しいそぎて彼見送る文
たまびそ賀を産へ行をそのあそ。後方に着そひ茂八へ飛び
かくふ急ぎ行○遠寺の鐘を聞まび草木も眠る丑満頃
とく人の所ちくねども有も寝も行晴まぶうへふ生茂
アそ見ごふ結こを聞ろうと思ふ。この細道を行ること十町
ごろ行て。寺門のあとけるぶ茂八はあをうけ茂ヲ手あぶく
些待て居て呉ると便ろう合達とおぶき物を把ヤ。鼎の
傍より切穂ろ宮ろう徒をおつまそ。カチリ〳〵ト燈を明け茂ヲ

遠入る文ト鼎をひらきまへコツと言聞も大遠らしのる何ふしろ
不残寝ごろうふ初合ぶ悪いス。ア〳〵ととろう入まやうト赤
傍の本戸をひらき。内言聞ともおぶしき所の戸を明け。お松を
加ろうやそそと居ぶ。加ろ茂ろ八侍ろ鎗を掛ろて帰ける。
お松ふこふ居て。宅舎の中ろを見ろふ。その掛り武家屋
敷のごろくふして機次ヤグ隠ろ侍の住ろ人男まび。玄
軍ろ人鎗ヤ刀みごをうけろ紳。仲〳〵町人の寝ふ人あび。
きそとそ茂八ふ本ろ活ま。ろ人誘引ろけるぶと今更


義八が陰謀お松と
猪之吉
入谷の別業へ
いざなふ

義八

袈裟の情〻して。四辺を見まわして居らうけるふ。頻て茂八が来らう
乃殺を殺げ。こりゃあ輝草を持て来ら 茂 何ぼうぞおお松
さん 時ならうさらう 松 アイサ 何ぼうこれ程まで有るかしらそして
ちゃうど儀さんの老爺さんの宅へ。何ぼう大造ごさ 茂 大造ごさ
自己の殺魂お出遊〻きまる。清庵のおじ屋敷ごア。砂浦の
清庵所まで。まごおの二十町も在らう 今夜往くべ沢
山もあるべ。道も物騒ごさう。こりゃ高着さごア。今に
茂 清庵を持て来らう。寛ろと寝て聖砂浦へ往うサ

松 ヨヤ 左様久。丈夫ままと聖出て来まべ。寝ることよ。松きやア
まと暗へ知べ。左様よ。左様よ。茂 儀さんも
寝まらうも。砂浦といふア 何ぼうぞ知らうあへのうまと来らう
茂 十五 寝でも知て居らア。どう世今歌中に往くものの
出来 ねへのも不義義ッサ 松 そうやア お茶 松と同往ごう。
出すうと遣へあへけまど。何ぼう旅でもあるやア 往まの。知
あへ前へ海へあへ。あへ海へ。こりゃ海へ。儀さんも儀さんご。
松 ヨヤ 左様よ。茂 こりゃ。こりゃ。こりゃ。今夜出。往くものの

彼を語ることを聞くその心根を大略ハ存ずるもおぼゆ
顔 爰ハ 左様ニ 全体望 出まゝ冥いこのヨ丈ふ他の者
冥らうけまゝ。道連ゞ爰ハとのふものゝ尚急後ゞ
工お相さん何ゞ茶の乳ふ入ぶれく。ア知れく。産婆を初
て居る何ふ。自己ゆゑ実ふ情れくゼ訪ゞ何の用
果ゞ。どうもあゞ待て場くらきれくハテ長くしと
男ハ多ゞ。今さん金を運で見ゞ時の一晩でも黙い
頭をけふまゝるもの。支ふ世間の取沙汰も。その雑

郎ハ磯さんゞと。図で見ちゃア拾方ゞれくこ。まゞ内ふ通ふハ明
らゞ。今貝ハ何様しゝ神ゞ及の八谷せやふ茶をつまて。
出る坂ふ内ゞのハ年頃月ゞの金頼ゞ。恨ふ河郎の茶ゞ
変ふと砂浦へゞ内ゞと住ゞ。主利ゞゝハ住ゞ所をかゝやへ
待んで道を教えゝふ谷ふ頃入ゞ谷別荘寺ハ日頃ふ智易
きふ清公さまで。借ふけゞとの書院ゞゝ三十日何ゞゝ。猪
ゞ。サア早く寝て寝ゝト傍の押入引あけて枕や
ふる横蒲ゞ出ゞハ谷自ゞ伸ゞ。二ゞ枕の形底いふ偏ゞ

との継しいさん。忠八ハお松が取付けば 忠「コレサ何を其様によ
寒苦で居るのだナ。今も今とて通り。お菊坊めハ白子屋の
丈八じやァねへが山伏町の燈籠ぢ人も月夜に釜の平内。
女ハ石仏だと人も構ひかけてどうでも口癖に徒跣まで
甘ねぶりその深切をナア。是お松さん出入りと汲んで見ても
男ハおろる人せドカ任せて抱すくめ。是床の上え引あげるお松ハ
今更恥の身逃でうとも道ハ知らぬ闇がりで暮間の晩燃
處女のやうに逃げ人に覚えた万事に論ぬ如くすると 忍そ

定めて完次第ひ 松「然様ならばしてお菊様の御深切ハ定めし嬉
うございますよ。なにお識さんと彼様なりで見ると。どうもお菊
様とまた一所にハ成ますまいが。ござりますまい。殊に今日識さんの宅へ
遣入る様に成りてお見なさいよ。今よく済まへどやァわりませんか。
まあし。それやア様が言けれども。お菊様も義理のあるのだけれど。
ア一通り言ふのハ分解るのう言ますよ。決して悪く思て
お呉なさいますなよ。折角此様よ信切に言てお呉なさるのを
千様の訳でもないでござりませぬ。お菊様何にも彼是と言ますものを。

それ支とも虚仁アイと言ふべけまどト思ハせ振の技巧ハ猶も
男仁こゝを捨せる。仕事もて得そま者の流まを然して外さ八
しめん。
くも康の魂魄そまさ八ふ初ふで愛八ゞ多付らまてても儀どゑふ。
桜雨うる桜雨の雨暁方近くうりふけり。

娘太平記四編巻之上終